

ミュシャ展 パリに咲いたスラヴの華

国立新美術館（東京・六本木） 2017.03.08～06.05



「アルフォンス・ミュシャ」(1860～1939) は、モラヴィア（チェコ）生まれで、19 世紀末パリで活躍し、数多くのポスター、装飾パネル、カレンダーなどを制作したアール・ヌーヴォーを代表するクラフィックデザイナーである。

彼の作品の特徴は、“星、宝石、花などの様々な概念を女性の姿を用いて表現するスタイルと、華麗な曲線を多用したデザインである。”

この独特の作風で美しい色彩と流れる曲線のきれいな女性像や、花の装飾にスラヴ民族や日本美術などの要素を取り入れた作品を数多く制作した画家として名高い。」

《四つの花》 「カーネーション、ユリ、バラ、アイリス」 1898 年リトグラフ
画伯の得意とした個性豊かに咲誇る花々をテーマとした「4 点セットの装飾パネル」で、それぞれの花の特徴を擬人化して表現している作品である。

左側から「カーネーション」は幾重にもなった花びらのような髪型と赤い衣装を身につけ、「百合」は上向きに凛としてたたずみ、「薔薇」は花の女王の如く気高く正面を向き、「アイリス」は優しさや優雅な表情を浮かべている。

《スラヴ抒事詩》「原故郷のスラヴ民族」 全 20 作からなる超大作 1911 年



巨大な油彩画（6 m x 8m）は、スラヴ民族歴史に基づく「10 作」とチェコ人の歴史に基づく「10 作」の「連作」である。

全景は満天の星空が広がる星空に、異民族による襲撃から逃れ草木の陰にうずくまるスラヴ人男女が描かれ、左端の地平線の彼方には燃え上がる村の炎が、右側の宙に浮かび両手を広げているのは、スラヴ民族の守護天使である。これ

らの超大作が“たどり着いたのは、画伯の” **故郷チェコへの思い**”の念で、展覧会では本国チェコ以外では初公開となる注目される「シリーズ作品」である。

参考：「芸術新潮」 3月号（2017）、富田章他：「ミュシャのすべて」角川新書（2016）